

会報

VOL.17



波止場町便り

2026年3月31日発行

記憶される港の風景

(その9)

貧しい現実と幸福な「嘘」



記憶される港の風景(その9)

1. 「物語」をつくる人々は何処から

港に関係するある有名人が書いた、エッセー本の中に「若い頃に夢を抱いた人間は成功や失敗に関係なくいつまでも夢を持つことができる。私は今年で80歳になるから、わが身を例にとってそう断言してもよいと思う」というくだりがある。夢というのは実に厄介なものであると思って生きてきた。というのも私の青春時代というのは「青春が美しいなんて、誰にも言わせない」とか「夢から覚めた時、夢を嘲笑せよ」などという、到底素直とはいえないアンチテーゼという緊張を生きていたからである。そして、ジンテーゼという出口は朝令暮改のように朝に発見したと思っても、夜には沈む夕日のように見失っていたのである。今振り返ってみても30台まではよく夢を見だし、忘れず覚えていたりもしたのだが、最近は夢を覚えていないのである。夢というのは「物語」でもある。ということは「物語」をつくる人々は夢をつくる人々なのだろうか。

矛盾しているのだが、私はジャン・コクトーのように「裏返して見せようか、手袋の指のように」という目線を失ってはいない。にもかかわらず、比較的素直で単純で楽天的である。だから、港湾で共に働いていた仲間の言うことを疑わず、素直に事実として受け入れていた。たとえばAさんであるが、息子が父の日にネクタイを買ってくれてうれしいと語り、心優しい子供だと語る。Aさんの葬儀の後で、聞いていた心優しい息子はどうしているんだろうかと尋ねたら、古くからの仲間のBさんはAさんには子供はいないと言う。そのBさんも亡くなった際に、彼が私に語っていた「娘がフランス人と結婚して妊娠したので、女房が出産の手伝いのためにフランスに行っている。女房は大阪の阪急デパートのワイン売り場で、コンシェルジュをしている」という話がつくられた「物語」であったことを私は理解する。罪のない、悪意のない作り話である。よくある不幸な話をして金を借りようとか、事件をでっちあげて洗脳しようとか、マウントしようとかの類ではなく、幸せであることの「物語」なのである。

「幸せであることの物語」をつくる人々は何処から来たのか。幸せである人が幸せである事を脚色して語るのは珍しいことではないが、まるっきりの「事実でないこと一嘘」を疑わない人に語るはその「嘘」がばれたとしても害はなく、幸せな気分は共有出来ると思っていることなのだろうか。



Aさん、Bさんは神戸に縁のある人たちである。神戸に縁のあるものは当然として、九州出身者や四国出身者も故郷のことを話すものが多かったのは以前にも触れたように航路であったり、業界のリクルート活動の仕組み方によるものであるが、「物語」をつくる人々は神戸に縁のある人たちが多かったように思う。神戸以外の出身者は故郷や神戸に来るまでの仕事について語り、神戸に縁のある人たちは「つくられた家族の幸せ」を物語る。この特徴は過去を詮索せず、日々の評価の中で生きている「流れ者」としての地方出身者と地元出身者の実存に規定された意識の発露である。

嘘についていえば、一般的には良くないとされ、極端な道徳観念の持ち主は犯罪的だとも言う。しかし、現実には「嘘も方便」「良心に恥じない嘘の妥当性」はケースバイケースとして評価の対象である。その点でいえばAさんBさんの「嘘」は何の問題もないケースである。それはつくられた物語であって、深く考えさせる有意義な「現実」だともいえる。私が「物語をつくる人々」の中で記録しておきたかったのは、「嘘の物語」ではない。貧しい現実を超える嘘で塗り固められた物語の豊かさと、意味深さを記録したかったのである。物語をつくる人々の「嘘」でありながら、薄っぺらな倫理ではない真実を上回る「夢物語」と、語られなかったものを記録したかったのである。

2. 貧しい現実と幸福な「嘘」

波止場町が労働力供給基地であった事は、これまでも何度か触れてきた。

常用労働者を抱える企業も多かったが、波止場町の特徴は港職安での日雇港湾労働者に対する紹介業務が7時から日々行われており、仕事にあぶれた場合は福祉センター2階でアプ

レ手当が9時半から支給されていたことにある。就労出来たものは求人店で就労後に日当をもらい、あぶれた者はアブレ手当が支給されるまで様々な方法で時間をつぶす。数千人の人々が波止場町一帯にあふれかえる独特の雰囲気は、記念パネルや写真集、この会報でも紹介しているところである。

生活のサイクルが日々であるということに規定された日雇労働者の一群が、波止場町を中心に存在していたのである。それは「ニセモノではない日々を生きる」ということでは、釜ヶ崎や山谷、港でいえば横浜の寿町とも共通したものがあるのだが、一概に「流れ者の地」と括れないものが、波止場町一帯の歴史的特性の中にあるように私は思う。日本一の商社と言われた鈴木商店や川崎重工業が近場にあり、社会的事件や労働争議とも密接な地域であった。1950年の朝鮮戦争時には川崎重工や弁天浜の労働者に反戦ビラがまかれ、工作隊数十名が検挙された事が報じられている。2020年の港湾労働者福祉センターの解体まで、この地域は神戸の中で最も港湾労働文化が育まれ、蓄積された場所であったようにも思う。たとえば、1969年10月に創刊された『港湾KOBE』と云う交流誌があるのだが、

港湾労働者の情報・文化総合誌としてだけでなく、この地域の過去を探る研究資料としても貴重である。ただ、この雑誌から見えるのは、「貧しい現実に対する前向きな本当」であり、幸福な「嘘」は見当たらないことである。そして実に印象的なのは、1988年までの登録日雇港湾労働者時代までは幸福な「嘘」に遭遇した記憶はなく、常用労働者に移行してからのように思っている私の記憶の正誤である。

日本の美学では、人々を幸福な気分させる「物語の嘘」は、愛のない正直よりも高度で知的、そして意義深いものであるとされる事もあった。残念ながら今日では、講談や落語などで描かれてきたその様な世界は、支持を失いつつある。私が経験した「物語をつくる人々」が救済という使命を果たそうとしてのものではないことははっきりしている。ただ自分のための物語であり、万人どころか自分さえも幸せにしたかも怪しいところである。しかし、害はないのである。世界を揺るがしている残酷な嘘やだまし討ちを見る時、「彼らがどう視られ、どう語れなかったか」を改めて考えるのである。 (続く—磯田 和男)

活動報告

1. 本年度第2回 月例交流会 開催

3月26日(木)夕、今回もいつもの通り地域内の清掃を全員で行ったのち、場所を中華料理店 味香園に移して、本年度第2回目の月例交流会が行われた。

第1部は、神戸市港湾局ウォーターフロント再開発部長 白波瀬浩司氏の講演「神戸港ウォーターフロント開発の続報」があり、会員全員の関心の的であった、今後神戸港のウォーターフロント開発がどうなっていくのか?を、神戸市港湾局の直接の担当部長から詳細な説明を伺い、興味津々に聞き入った。

途中で、料理とアルコールも出て、話題は尽きず、大いに盛り上がりました。

また、第2部は、協議会の活動報告があり、①記念碑パネル増設の中間報告、②写真集寄贈の経過報告等があった。その間、町中華に舌鼓を打ちながら、大いに歓談をして、懇親を深め、楽しいひと時を過ごしました。

今回も総勢19名が集い、有意義な一夜となりました。



2. 記念碑パネル増設の中間報告

昨年の通常総会において、本年度事業として、記念碑パネル3枚を自己資金で増設することが承認されました。それに伴い、増設するパネル制作の詳細につきましては、現在事務局において、3枚制作の予定を2枚に変更することも含めて、協議検討中です。

中間報告としましては、パネル1枚目は波止場町を起点として、神戸港の歴史を語り継ぐ、協議会発足の趣旨・説明を兼ねたものとする。パネル2枚目は現在の神戸港の航空写真を掲載して、その中から波止場町地区の昔はこうだった、と以前設置されていた建物等と比較し、新旧のコンテンツをQRコードから開いて見ていただき、説明する形にしたい、との報告があった。

個別に上げて、説明する新旧のコンテンツは以下の項目を予定しています。

①波止場町通り駐車場

(旧福祉センター*神戸港湾労働福祉センター)

②ハローワーク神戸 神戸港労働出張所

(兵庫県公共職業安定所神戸港労働出張所) (*新旧同じ)

③国産上屋1号館・2号館・3号館 (*新旧同じ)

④かもめりあ 中突堤中央ターミナル(旧神戸中突堤の基部)

⇒(昔は海の中で、舳だまりがあり、たくさんの舳(はしけ)が停泊していました。)

⑤神戸ポートタワー (*以前はありませんでした。)

⑥モザイク・高浜岸壁

(旧三菱倉庫の倉庫が並んでいました。)

⑦ホテルオークラ神戸 (旧メリケン波止場)

⇒(昔は海の中で、舳だまりがあり、たくさんの舳(はしけ)が停泊していました。)

3. 写真集寄贈の経過報告

写真集「KOBЕ 近代港湾 荷役の地 弁天浜・国産波止場：神戸開港150周年」の寄贈の現状につきましては、

①昨年11/18の寄贈式で、神戸市内の全小・中学校、市立高校へ寄贈済(253冊) (*神戸市教育委員会事務局)

②本年5月の連休明け総会時に、兵庫県下の全公立高校へ寄贈・配付予定(164冊) (*兵庫県教育委員会事務局)

③本年4月27日の校長会の総会時に、兵庫県下の全私立高校へ寄贈・配付予定(51冊) (*兵庫県私学総連合会)

で進めており、5月連休明けには、神戸市内の小・中学校、兵庫県下の高校にすべて寄贈、配付が完了します。(写真集の寄贈冊数合計468冊)

また、高校への寄贈・配付の際は、挨拶文を添え、協議会の説明、写真集を制作した経緯を記すとともに、末尾には寄贈の趣旨等を明確にすべく、以下の一文を付けております。

(兵庫県の全高等学校の校長先生宛へのメッセージ)

「今回、この写真集を兵庫県下の高等学校全校に寄贈させていただくことで、若い方にも目にさせていただきと存じます。神戸港が世界的にも有数の港であり、現在も神戸港では様々な荷役作業が行われており、その作業はエッセンシャルワーカー(生活必須職従事者)として、生活になくてはならない仕事であることを理解していただき、地元兵庫県内で、神戸の港で、働くことも就職先の一つとして視野に入れていただきたい、との思いからです。

最後に、是非この写真集を手にとっていただき、先生方を始め、生徒さん達に神戸の歴史、港のことに少し興味でも持っていただけたら幸いです。今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。」

会 員 一 覧

●株式会社メイフェア

●住井運輸株式会社

●ニッケル.エンド.ライオンズ株式会社

●甲陽運輸株式会社

●二和興業株式会社

●株式会社KDS

●商船港運株式会社

●A&D MUSIC

●神菱港運株式会社

●全港湾神戸弁天浜支部

●株式会社アバストコーポレーション

●株式会社住友倉庫 神戸支店

●早駒運輸株式会社

●株式会社ユニオンエージェンシー

●株式会社ラススイート

●中央港運株式会社

●上津港運株式会社

●走水神社

●昌栄運輸株式会社

●株式会社クリアス

●兵庫県信用組合本店営業部

●株式会社アテネエンタープライズ

●株式会社ハイファイブ

●合同会社リリー企画

●株式会社SORA

●株式会社I・B・C

●株式会社パワーステーション

(順不同)